詩の〈言語技術教育〉論

―はたちよしこの詩の〝言語技術〟と授業計画モデル―

佐藤洋一

はじめに

詩教材の指導の場合、一つの「主題」に迫る分析的な授業、あるいは技法・形式や文学史の知識を覚えるだけの受け身の学習が授業を詰まらなくしてきたことは、これまでも指摘されてきたことである。[1] 詩で教えるべき「指導事項（教育内容）」・「正確に読む」部分と「豊かに読む」部分を鮮明にするためには、詩の〝言語技術〟という観点から詩の言語操作と多層性（語彙レベル・「場面」レベル・イメージレベル等）・その効果と個性（特有のイメージ・ユーモア等）・読みの多様性の根拠等について考えることが有効であると考えている。

これは、文学作品における「イメージ（描写）」の言語という特質と機能に気づかせることであり、対比的に論説文や説明文の「論理」の言語としての特性と意味を教えることにつながるものであるからである。また、読解に終始することなく「自己表現」の基礎的技術と発想の方法に生かすという観点から光りを当てて読むことにもなる。[2]

本稿では、詩の〈言語技術教育〉を実践レベルで具体的に考えるための基礎的考察として、また、一つのモデルケースとしてはたちよしこの詩を取上げ考察する。現在、はたちよしこの詩で教材化されているのは「レモン」（学校図書・日本書籍／ともに小学校五年）だけであるが、その他の作品も簡潔で分かりやすく、またユーモアと愛情あふれるあたたかな作品が多い。[3] 詩の〝言語技術〟という観点から詩の魅力と表現方法・教材性・教材化への視点・授業計画（発問を中心にした学習活動の基本モデル）等について考えてみたい。以下、次の順序で述べていく。一、詩集『レモンの車輪』　二、詩の方法と表現の特質　三、はたちよしこの詩の〝言語技術〟　四、詩の〈言語技術教育〉の立場からの指導計画　おわりに。

一、詩集『レモンの車輪』

教材「レモン」を含む、はたちよしこ詩集『レモンの車輪』（1988年12月刊・教育出版センター）の構成と成立について、はじめに簡単に触れておきたい。詩集全体の構成は4部33編の詩からなる。末尾に吉野弘「廿千さんに」という文章と、作者による「あとがき」がある。装画・挿絵は「少年詩を書き始めて20年の間、心の中で師と尊敬」してきたまど・みちお（詩集「あとがき」）である。

吉野弘の文章には、詩の教室で出会ったはたちが吉野弘に詩の指導を依頼し「面白くなるまで『要再考』という書きこみ」をして返すという経過を経て一年半後に詩集にまとまったという経過が書かれている。詩の評価について「野菜、果物、花、小動物、身のまわりの器物などによせるあなたの親愛感は、しゃれた着想と洗練された言葉により素敵な作品」になったこと、はたち自身の「少年詩」をまとめる意向に対し、吉野は「〝少年詩〟でもあり、〝大人詩〟でもある作品」を期待したこと、結果として「〝少年詩〟〝大人詩〟の魅力を共に備えた詩集」になったと語っている。

詩人の現実に対する「親愛感」が「しゃれた着想と洗練された言葉により素敵な作品」になったものとしては、特にⅠ部の野菜シリーズと、「レモン」を含むⅡ部の果物シリーズの何編かをあげることができるだろう。教材化したときに、詩のおもしろさを体験させながら、詩の方法や「イメージ（描写）」の言語としての特性、言葉の使い方、その個性と「読み方」、また、現実を見つめる眼に気づかせることができる。「自己表現」の一例としても有効な教材になると思われるからである。

二、詩の方法と表現の特質 ―詩語・イメージの構成―

(1) 白葱

まっすぐな一本の決心

これはⅠ部冒頭の詩である。

題名の「白葱」は素材・話題を提示している。表現部分の一行「まっすぐな一本の決心」は「まっすぐな一本の」という野菜の形態・形のイメージと、「決心」という詩人の判断・評価の組合わせ、そして、イラストの三つの構成からなる。それは次のように、ＡＢＣの三つの要素の構成としてまとめることができそうである。

詩の構成

Ａ 題名……野菜の素材・話題の提示〔語彙の選択⇩野菜〕

Ｂ 表現……野菜のイメージ（形態）＋詩人の判断・評価（見方）の二つの組合せ〔平易で簡潔、一行詩〕

Ｃ イラスト……絵の表現のイメージ

「白葱」にみられるこのような構成の型は、「B表現」（場面）が二～四連等と詳しくなったり、「Cイラスト」がないものも半数程ある等、いくつかのバリエーションはあるものの、基本的にはほぼ一貫した構成であるとみることができる。

「白葱」の詩の面白さの中心は、日常的な「白葱」の形というイメージに〝決心〟という意思・人間的な存在感覚を与えたところである。読んで行くと、野菜なのにまるで人間と同じように生きて、悩み、考えているように見えてくる。〝白〟という色の選択も、単なる「葱」「青葱」等と比べると、決意の一途な強さや潔さを暗示する。また、まど・みちおのイラストの線や長さは、読者にこうしたイメージをより具体化してくれているようである。野菜の形態（形）と判断の微妙な〝ズレ〟が「ユーモア」と楽しさを生み出す。また、野菜という「他者」の立場に立ち、現実を角度を変えてみる知的でしゃれた「見立て・ウイット（機知）」もこの詩の特色である。なお、こうした理解と見え方の変化（変質）は、詩を読むという〝経験〟を通しての「異化作用」（既知の概念や常識的認識が新しい枠組みや価値として再生する過程）であり、技法的に名づければ「擬人化（法）」という方法が指摘できる。

しかし、文学作品による「異化作用」という機能自体は既に常識的なことであり、問題はそうした「異化作用」の言語的構造と個性の意味にこそあるだろう。つまり、はたちよしこにおける「異化」の特質と構造を言語レベルで（言語の選択と組合せと個性、その表現効果等という観点から）具体的に解明することが重要なのである。

以下、教材開発と教材化のための基礎として、『レモンの車輪』の中から優れた作品を7編取上げ、検討する。詩作品の下の書き込みは、構成と表現内容の特色についてのまとめである。

(2)　青首だいこん

ここが
首だったのか
じぶんでも
しらなかった
まわしてみようか

――題名（素材・話題の提示。以下同じ）

状況設定と具体化の「場面」
①青首大根の「語り」（表現の視点）
②驚きと無自覚（ズレの効果）

――具体化の「場面」（ズレの効果）

この詩も、基本構造は「野菜のイメージ（形態）＋詩人の判断・評価」の組み合わせの表現だが、表現の視点を大根自身の「語り」にすることで、太くて身が締まり、およそ〝首〟等無いような「青首だいこん」が、「ここが／首だったのか／じぶんでも／しらなかった」と気づく感じが、読者の意識と「ズレ」て、間が抜けたおっとりした印象となり、大変ユーモラスである。また、「まわしてみようか」という思いも回るはずがないため逆に面白い。詩集ではこの詩には、イラストは無いが、指導の場面では「ここが」とあるか、どの辺か？　と絵（イラスト）を描かせる活動等も、書かれていることをもとにして書かれていないことを〝想像する（思考力）〟という意味で意欲と関心を高める楽しい学習活動の一つとなるだろう。

(3)　ピーマン

だれにも　すかれようなんて
おもっていません
肩をいからせ
胸をはり
なかには
辛口の意見を　いっぱいかかえて

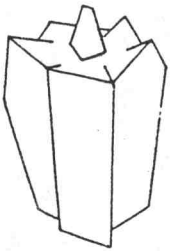
――― 題名

状況設定の「場面」
①ピーマンの立場から
②「常識的印象」「形態」の表現

展開の「場面」
①「形態」
②判断と評価

この詩は「白葱」「青首だいこん」同様、「ピーマン」の形態（形）のイメージ（「肩をいからせ／胸をはり」「辛口の意見」）を生かしている。さらに、「青首だいこん」では大根自身の「語り」という表現だったが、ここでは、表現の視点は外側（詩人）からであり、子供の多くはしばしばピーマンを嫌っているという野菜についての「常識的印象」（だれにもすかれようなんて／おもっていません）を生かしているところが特色である。

また、「辛口の意見」という表現について、「これは何か？（解答例、ピーマンの種）」、「どんな〈意見〉だろうね（解答例、ピーマンが嫌いな子供に、ピーマンが栄養があるから食べ



なくてはいけないと言っている）」等の発問は、その身近さ（親しみやすさ）のため楽しい活動になるだろう。

なお、「形態（形）」のイメージを生かした詩には、他に「なすび」「かぼちゃ」「唐辛子」「キャベツ」等があり、それぞれ楽しい作品でるが、ここでは省略する。

(4)　いちご

――題名

いちごが自分の体に書いた
読点ばかりの作文
、、、、、、、
、、、、、、、
、、、、、、、

文字は知っているのですが
おもっていることがあふれるほどあって
読点ばかりになるのです
、、、、、、、
、、、、、、、
、、、、、、、

状況設定の「場面」
①苺と作文（読点が似ている）
②苺のタネ（形態の類似）

展開の「場面」
①自己表現
②おもいがあふれる

「いちご」は、「、、、、」という苺の形態の特色・イメージを生かしながら、「おもっていることがあふれ」て言葉にならない様子と重ね合わせている詩である。思っていても上手く語れない、表現できない作文のイメージは、ちょっと見方を変えると、言葉に言い表せない苺の美味しさ（味覚）の表現と重なっているとも読むことができる。

以上の(1)～(4)の詩は、主に野菜・果物の「形態（形）」のイメージと「常識的印象」を生かした詩と読むことできるが、「いちご」の詩で指摘したような「味／料理・調理法」等のイメージを効果的に生かした詩もある。「玉葱」「わさび」「土しょうが」「胡麻」「パセリ」「もやし」「かつおぶし」等である。「玉葱」と「わさび」を取り上げる。

(5)　玉葱

身をはがれ
こまかくきざまれては
黙ってなどいられません
相手の目に
刺すような　痛みを
お返し

題名

状況設定の「場面」
（調理される状況とそれに対する不満・玉葱の立場から）

展開の「場面」
（涙がでる程の痛みの原因の説明）

「玉葱」の形態と料理（「身をはがれ／こまかくきざまれ」の場合は、「わさび」の辛さ（味）と、育つ場所の爽やかさ・厳しさの二つのイメージの組合せである。る）のイメージを生かしながら、刻まれる痛みの「お返し（仕返し）」として目を攻撃していると語られる。次の「わさび」

(6)　わさび

ツーンとした　辛さ
水の冷たい渓流で育った　わさびの
身のひきしまるような思いが
こんな辛さになったのかしら？

題名

状況設定の「場面」（わさびの印象）

展開の「場面」
（その背景への想像）

ところで、詩集『レモンの車輪』の詩は、野菜・果物の「形態」「常識的印象」「味／料理・調理法」のイメージを生かした詩はほとんどであり、知的な発想・着想の面白さ、洒落た表現の組合せ（ユーモア・ウイット）の表出自体に詩の表現のねら

いがあることが分かる。しかし、次の「網メロン」「サボテン」のような作品は、そうした機知（ウイット）と見方のおもしろさの断片的な表現にとどまらず、人間の内面性や存在感覚の在り方の表現にまで一歩踏み込んだ表現になっていると読める詩である。

(7)　網メロン

メロンは
自分で編んだ
白いネットの中に
はいっている

かたいネットの中で
うすみどりいろの夢を
閉じ込めている

つよく
結んだ編目は
メロン自身にも
ほどけない

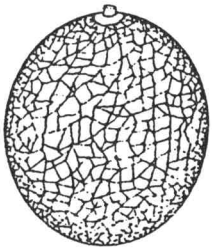
――題名

状況設定の「場面」
・メロンの「形態」「常識的印象」の表現

＋

展開(1)の「場面」
・判断と評価
（「形態」＋果肉のイメージ・色と味は？）

展開(2)の「場面」
・判断と評価
（メロン自身の苦悩・もどかしさの表現）



網メロンの〝編み目〟は、あらためてよく見ると何ともどかしい感じがするものである。この詩は網メロンの編み目の形と堅固な外観のイメージ（形態）・ロマンチックな〝うすみどり色の果肉（色・味）〟という内部を対比しながら、自分自身にもどうにもならないものに耐えている、生きるもどかしさとでも言うべきものを暗示している詩と読むことができる。例え

ば、メロンの果肉（内部）は必ずしも〝うすみどり色〟ばかりではないが、詩の表現の中で〝うすみどり色（色と甘さという味覚）〟と〝夢（希望、願い等）〟が組み合わされることで、網メロンがある存在感をもってイメージされてくるようになる。

「（　　）いろの夢を〔解答例－黄色・朱色もある〕」という形で、空欄にして色を入れさせる発問や、「うすみどりいろの（　　）を（解答例－恋・悲しみ・別れ・空とか）」という発問は、表面的には単なるクイズのような単純な活動だが、文脈（場面）の中で考えさせることで、詩の言語構造（イメージをつくる仕組み）読み手の経験や年齢によって差異のでる詩の言語の〝象徴性〟（多義性）等のおもしろさに気づかせることができる。こうした知的で個性的なイメージ操作と解釈の多様性等を、小学生とともに中学生高校生も楽しむはずである。

(8)　サボテン

題名

(1)

どうか　わたしのうえに
風船を　おとさないでください

状況設定の「場面」
（サボテンからの語り、意外な肉声と内容）
（風船のイメージ）

(2)

じぶんのトゲで
だれかを
きずつけてしまわないかと
いつも　心を痛めています

展開(1)の「場面」
（判断と評価／形態と常識的印象のズレ）

花が咲いたときだけ
ほんのすこし
つぐないができたような
気分になります

展開(2)の「場面」
（判断と評価／花のイメージとつぐないの関係）

「サボテン」というと、一見いかにもトゲトゲとした無愛想な形と視覚的な痛々しいイメージ（形態）がある。また、水や緑等が少ない砂漠でも生きていける逞しい生命力等のイメージから、他の多くの植物等とは関係なく全くきままに生きているような印象（常識的印象）を思い浮かべることが多い。この詩はこうした「サボテン」についての一般的常識的なイメージ（印象）を生かしながら、実は、他者を傷つけることを恐れ「いつも　心を痛めて」いるという詩人の発見が、読者のもつ意識と「ズレ」て大変効果的である。〝サボテン〟が自分自身を客観的に認識しているという人間的な奥行き（自己客観化の態度と認識）が、詩にほのぼのとした優しさとペーソスの表現になっている。

三、はたちよしこの詩の〝言語技術〟

教材化の視点から、はたちよしこの詩の〝言語技術〟（「言語構造」の特質と効果）と「教材性」等についてまとめ、教材詩「レモン」の特色のポイントについて検討する。

(1)　詩のテーマ（主題）

詩が表しているものを一言で言えば「野菜・果物の身近なイメージを生かして、人生や日常の意味を発見、表現した詩」と言うことができる。野菜や果物という日常的なイメージに「人生」の真実をみるというテーマ、つまり、日常の断片に「人生」と「人間性」の真実と意義を発見するということ自体は、特に目新しいことではない。

しかし、抽象化された観念の平凡さは決して、詩人にとって不名誉なことではない。詩の価値は、詩人の意図を超えて実現されている多様な解釈の可能性（テーマの多層性・多様性）にこそあるからであり、それは、表現の構造・言葉の使い方等の言語技術・「言語構造」の特質と構造にこそ表れるからである。

(2)　詩のイメージの「構成」　―三つの要素と意味―

ここでの「構成」とは、詩に示された連のまとまりや区切りのことをさすのではない。詩の表現を「イメージのまとまり（場面）」から分けた時にみられる、詩の深部で詩の構成している内容のまとまりにつけた名前のことである。それは、時には詩人の意図（区切りや連の構成）とは食い違うこともある。

この観点は、詩と詩人固有のイメージとリズムの特質をとらえるための手がかりであり、一語一語の詩語の重みと効果を「語と語の関係」「場面」「文脈」「イメージの方法」等の中で、つまり、詩の言語構造と言語操作の個性を部分と全体をふまえながら〝構造的に〟〝立体的に〟とらえるための一つの有効な方法である。詩の言語要素（一部の語彙）のみに着目し、それが文学教材における「言語の教育」であると短絡的に誤解した実践や、詩の言葉やイメージの一部を詩人の生涯や時代背景とつなげて解釈する恣意的な研究態度や実践は今でも多々見られるところである。こうした態度と方法も一つの「読み方」では

あるが、詩教材の本質（原理）に即した一般性ある「読み方（理解技術）」であるとは言いがたいため、教科書で取り上げられることの多い、比較的やさしい児童詩や少年詩は理解できても（小学校段階）、大人の詩人の作品や近代現代詩の魅力を自力で楽しみ学んでいく〝方法・読み方〟につながる基本と態度は身につけることはできにくい。

はたちよしこの詩は、「状況設定」と「展開」の場面の二場面からなり、詩の話題（題材）を明示する題名を加えると、基本的には三つの要素によって「構成」されていると読むことができる。要点をまとめると次のようになるだろう。

題　名	詩の中心となる話題・題材の提示
「状況設定」の場面	(1)野菜の「形態」「常識的印象」「味／料理・調理法」のイメージを生かした表現 （読者の「意識と無意識」の利用） (2)「他者」である野菜の側にたった表現「視点（立場）」の変更 （意外な「現実」、「ズレ」からのユーモアや楽しさの効果）
「展開」の場面	(1)詩人の判断と評価の表現 （「状況設定」のイメージ（読者のイメージ）を「ズラ」す詩人の発見・見立てとそのイメージ化） (2)色彩・感覚・内部と外部・自己と他者等の関係軸を多用する (3)人間関係の中の「優しさ」「痛み／傷つける」「自己主張」「悲しみ」「自分でもどうしようもないものを抱えるつらさ」等がテーマ。 それが、「形態」「常識的印象」と「ズレ」るところが読む楽しさ。

これまで私の調べた範囲では、近現代の詩人の多くの作品では、〈〇〇が△△した〉という「状況設定」の後、それらを「具体化」する場面が表現されることが多い。[4] しかし、はたちよしこの場合はこの「具体化」の場面はないのがほとんどである。

結果的に、短く鮮明な「設定」のため平明で分かりやすくなっている。題名と「状況設定」で簡潔にイメージを形成する表現、さらに、「展開」の場面でそれに対する詩人の「解釈（意味づけ）」が語られる。その「解釈」の新鮮さ（色彩・感覚・発想・リズム等）が、詩の特質（美質）であり、魅力的となっているのである。劇的な展開や厚みのある構成ではないため、存在の深部に関わる深さを追求する詩ではない。機知（ウイット）の詩が多いゆえんである。

また、こうした特質は「展開」の場面にもみられる。「展開」の場面は「状況設定」に対する詩人の判断と評価の表現が語られるが、「状況設定」のイメージ（読者のイメージ）を「ズラ」す詩人の発見・見立てとそのイメージ化に特色がある。それらは多くても二つの要素からなっている場合が多く、「自己」と「他者」／「内部」と「外部」の関係軸からの人間関係の暗喩として（発見の造型、イメージ化）表現されている。

(3) 詩の「教材性」

詩集『レモンの車輪』を検討する限り、はたちよしこの詩の本質と魅力、教育的価値は、次のようなところにみられるということができるだろう。

① 詩の題材の身近さ・親しみ易さ。野菜・果物という日常的な食べ物は、だれもが好き嫌い等の好みや特有の思い出等を持っているのが普通である。そうした題材・話題の親しみ易さは、詩の表現と世界に入りやすくしている。

② 語りや語彙、表記の分かりやすさ。平易な語彙の選択、ひらがな中心の表記、野菜や果物の「語り」という楽しさの効果。

③ 批評の性質・基本的に「ハッピーエンド」の発想であること。詩の中の「発見」を読むことによって、読者は既成の認識や思考が揺さぶられるが、それは存在全体の変更を迫られるような根本的なものでは無いため、比較的安心して読むことができる。また、詩の表現の背後には、詩人の生活と現実への愛情、肯定的態度があることも、読後の楽しい印象や読書への意欲を育てることにつながる。例えば、萩原朔太郎や村野四郎等等の詩に多い、グロテスクで悲劇的、幻想的なイメージの作品に比べて、これらの性質は詩の魅力や方法の基本を知るための入門として指導しやすい肯定的な性質をもつということができるのである。[5]

④ 詩における言語技術の特色や個性。読者のもつ「常識的イメージと印象や感覚（いわゆる意識と無意識）」を生かしながら、それらと対比的に詩人の主張・判断が述べられる構成なので、詩の基本的な構成と「読み方」（例えば、伝統的美意識の変質化・「ズレ」の方法・言語の違犯性と批評）等について、楽しい体験として気づかせることができる。例えば、ここでの「イメージ」の使い方には、「形態・形」／「常識的印象」／「味・料理・調理法」の3つのイメージを生かすという方法とその組合せを指摘することができる。その他、

色・色彩に込められたイメージ、視覚的イメージの他に、聴覚的イメージ・味覚（味）・感覚（匂いや香り、雰囲気）等がある。

⑤　ユーモアと機知（ウイット）のおもしろさに気づかせる。ユーモアの定義は様々だが、他者の欠落や失敗を笑うコミックや皮肉・冷笑等の意味のシニック等と違い、ユーモアは他者の失敗や苦悩を包み込み許す人間的なあたたかさと自己への厳しい批評精神につながるものである。[6] はたちよしこ自身が「相手の気持ちになるということは、逆に自分を見つめ直してみること」（あとがき）と述べているが、取り上げた詩は全て、野菜や果物の側という「他者」の立場に立つところから書かれた作品である。視点と立場を変えるところから見えてくる世界と自己、他者の立場に立つ想像力とその表現（ユーモア・ウイット・機知）、これらは詩集『レモンの車輪』を貫くはたちよしこの詩の基本構造であると言えるだろう。

以上のことを踏まえながら、教材の詩「レモン」のテーマ（主題）・〝言語技術〟と方法の特色と、それを生かした指導の観点等について、簡単に考えてみたい。

(4)　「レモン」のあこがれ

―詩の「構成」とテーマの解釈を中心に―

「レモン」は二行単位による五連構成の作品である。しかし、イメージのまとまり（「場面」）から整理すると、「題名」「状況設定」「展開(1)(2)(3)」の三つの要素から成るＡＢＡ'構成とみることができる。基本的には「青首だいこん」「ピーマン」「サボテン」等と同じ構成であるが、「展開」の場面が(1)～(3)の段階からなること、「空間性」の表現が詩的な美しいリリシズムを形成している事などが特質といえるだろう。「構成」の要点をまとめたものが次の表である。

〈作　品〉

レモン

1　レモンは
2　遠くへ　行きたいのです

〈構　成〉

―　・題名

A　状況設定の場面

〈意味と解釈〉

○題材の提示とイメージ

(1)レモンの「形態」「常識的印象」
（「味／料理・調理法」のイメージ）

(2)「遠く」＋「レモン」の意思のズレ

3 うすく切れば
4 それがわかります
5 うすく切れば
6 いくつもの車輪
7 いい香りをふりまいて
8 車輪　車輪　車輪
9 レモンは
10 遠くへ　行きたいのです
（詩の上の番号は佐藤による）

A'　D　C　B

展開(1)
展開(2)
（空間性の表現）
展開(3)
（時間性欠如）
個性的判断
（認識と表現）
まとめ
Aの繰り返し

(3) 一見、論理的な断定と舌たらずの表現
(4) 「形態」の類似
（レモンの輪切りと車輪・視覚の表現）
(5) 「空間性」の中のレモンの感覚
（香り・雰囲気・色彩等＋馬車の駆ける響き、リズム等）
(6) レモン＝輪切り＝車輪＝馬車と空間
（奥行きが欠如している）
(7) 「あこがれ」の心のリズム
①イメージと感覚と馬車のリズム（共感覚）
②1、2、9、10行のリフレイン（リフレインと場面）
③頭韻、脚韻。シ・サ音の響き（音韻の効果）
④2行単位の構成。
○「まとめ」の場面は「対象化」と舞台の完結
○強調。イメージとリズムの拡大とリフレイン　の効果

この詩の魅力のポイントの一つは、「状況設定」の場面（末尾でも繰り返される）にある。〝レモン〟という果物（その形と感覚的イメージが強調されている）と〝遠くへ行きたい〟という希望・意思を結び付けたことにある（A場面）。〝レモン〟の願望として、「遠くへ」行きたいと設定されているのである。

B場面ははその根拠と具体化（展開）である。

「展開」を示すB場面の特色は、一つは〝レモン〟に対する二つの〈秘密〉の発見が語られていること、二つ目には空間的なひろがりの場面で（7行目「いい香りをふりまいて」）、視覚的イメージと感覚的イメージが交錯して表現されていること

（8行目「車輪　車輪　車輪」）の二点である。二つの〈秘密〉の発見とは、①レモンの形態（うすい輪切り）のイメージと「車輪（馬車を暗示）」のイメージの類似の発見、②レモンの輪切りのもつ感覚性（香り・色彩・雰囲気等の視覚・嗅覚等）から馬車（車輪）が軽快に駆ける響きと車輪の回転、リズムを想像していることの二点である。平易で短い表現によって、未知の世界への〝あこがれ〟と心のリズムが、〝レモン〟の爽やかな香気と〝馬車〟の車輪の音楽性とともに描かれている。

この詩の場合、テーマ（主題）をとらえるためには「遠く」への意味と〝レモン〟のイメージが、逃避や挫折等のマイナスの表現か、それとも、旅・憧れ・夢・恋等につながるプラスのイメージかを、3～8行も考え合わせて、文脈の中で読み取ることが必要になる。一般的には〝レモンのあこがれ〟〝レモンの夢〟等プラスのイメージで名づけられるだろう。ただ、3～8行に語られた〝レモン〟についての具体的な「発見」を強調すれば〝レモンの秘密・響き・香り〟等とも言うこともできるだろう。ちなみに、はたちよしこ自身は「遠くへ行きたい」について、「日常の中にあって本当は現実とかけ離れたあこがれ」と述べている。[7] なお、ABA'構成（CD場面は空白）と名づけたのは、近現代詩の〈構成原理〉をABCDと名付けられる4つの要素の構成に整理できるという仮説によるためである。[8]

以上、「レモン」を含め、7編の作品を取上げ、その魅力と詩の方法的特質について分析してきた。次にこれらの詩の魅力と「教材性」を生かし、文学の〈言語技術教育〉の考え方による《詩を読む楽しさと「読み方（理解技術）」の基礎的方法に気づかせる》という指導計画モデルを発問課題を中心とした指導案の形で考えてみたい。

四、詩の〈言語技術教育〉の立場からの指導計画

指導計画の輪郭について簡単に触れておきたい。指導のねらいの中心は国語科における「言語能力」の育成であり、ここで扱う詩教材（詩作品）は文学教材指導で育てるべき「イメージ（描写）」の言語の特性と教育性を典型的にもっている教材と言うことができる。

7編の詩（はたちよしこの作品）を二時間構成で「基本学習」から「展開・応用学習」の二段階の学習として扱い、詩を楽しみ学ぶ態度と基礎的方法（理解技術・読み方）を教えるということが基本的方針である。なお、学年の設定は、「レモン」が小学五年生の教材であることから、小学校高学年を想定しているが、詩の指導・〝言語技術〟の観点から文学教材を読む基礎的授業として位置づけており、小学校高学年以上、中学高校の授業をも視野に入れている。

ここでは、7編の詩を取り上げて教材化しているが、必ずしも7編の詩を、このような順序で教えなければならないということではない。詩の授業は、これまでもねらいにより多様な活

動と方法、位置づけがある。例えば、四五分の中で一編の詩を扱い、話し合うという授業・二～三編の詩を対比することで詩の「読み方」の観点に気づかせる方法・自己の表現活動（創作）と現実を見直す（生活の発見）という立場からの教材化も可能である。

ここでは(1)詩を読む楽しさと「読み方」の基本的着眼点に気づかせること、(2)説明（論説）文教材とは異なる、詩教材の「イメージ（描写）」の言語的特質に気づかせること、が中心である。詩教材の内容的価値とおもしろさから、詩の題材／話題／言語要素（一部）を生かした授業等は多くなされてきたが、こうした〝言語技術〟と「読み方（理解技術）」の観点からの段階的指導は十分に行われてきたとは言いがたい。

文学教材の学習指導では、表現やテーマ（主題）の分析と解釈をめぐってしばしば指導者と児童（生徒）の間で対立が起こることがある。その原因にはいろいろなものが考えられるが一つは、教材の持つ多義的な言語構造と象徴性をあるレベルで固定した切り取り方をしてしまう（主題は一つ）という考え方、そしてそれを教室の授業で唯一の正しい解答として押しつけることがあげられる。

また、子どもの関心や興味を教材の魅力と関わらせて本当に生かすという視点が十分ではなく、結果として〈指導者側の「論理」〉と〈教材の「論理」〉が中心の授業になっていることが挙げられるだろう。こうした問題を克服するための一つの方策としては、「論理的に（正確に）読む」部分と「個性的（豊かに）読む」部分を意識的に区別すること、つまり、指導すべき「言語能力」との関係から「基本」と「展開・応用」の関係と区別をすることが大切である。[9]

詩の授業
― 詩の楽しさと〈言語技術教育〉の方法 ―

1、単元　詩を読む楽しさと「読み方」の基本

2、単元について

ここでは文学教材を読む楽しさと、授業が分かる面白さを「体験」させることを通して、文学教材を読み、楽しむ基本的態度と方法に気づかせる。

3、単元の目標　―「文学の〈言語技術教育〉の考え方」から―

(1) 詩を読む楽しさと、「読み方」の基本的着眼点に気づかせる。

(2) 詩教材の、説明（論説）文教材とは異なる「イメージの言語」としての言語的特質、その表現構造の一部に気づかせる。（「ズレ」「ユーモア」「発想・視点」等）

(3) 「読み方」の「基本」の学習から、それを生かした豊かな読み方を体験させる。（「基本・典型」⇩「展開・応用」の系統的学習。「読み方」の体得）

(4) 詩についての自分の判断（好み・解釈）を持ち、表現

することができる。（教材詩の魅力と特質を「言語構造（表現技術・表現技法）」の観点からとらえ、「論理的に（正確に）」読む部分と、「豊かに（個性的に）」読める部分を区別する。）

4、指導計画（3時間扱い）

時	主な指導内容（学習内容）
1	①～④の四編の詩を読み、詩の楽しさと「読み方」の基本に気がつくことができる（「構成」と表現技術）。
2	⑤～⑦の詩を読み、①～④の学習を生かした詩の「読み方」をすることができる。
3	好きな詩を選び、基本的理解をふまえた「個性的な」感想をもつことができる。

5、本時の学習

(1) 指導目標（教育内容）

① 詩の「読み方」の基本（言語技術）に気づかせる。

ア、詩の表現（イメージ・意味）の特質である「異質な概念の組合せと効果」に気づかせる。

（既成の「意識・常識」と「無意識」の利用による新しい『現実』の発見という方法）

イ、イメージの構成の方法と特質に気づかせる。

（「異質な二つのもの」の「共通性・類似性」の発見。「感覚」の効果的な利用。）

ウ、リズムの構成の方法と特質に気づかせる。

（野菜と果物のユーモラスな「語り」・リフレインとイメージの関係と効果。）

② 「基本」を生かした「展開（応用）」の読み方を知る。

（①で学習した「読み方」の観点を生かして、他の詩の「個性」「方法」の特質に気づかせる。）

③ 詩についての自分の判断（好み・解釈）を持ち、表現することができる。

ア、授業中に感想・挙手・意見等によって、自分の判断を表現することができる。

イ、他の詩人の詩も読みたいという意欲や関心をもつことができる。

(2) 教材・はたちよしこの詩七編

① 白葱　② 青首だいこん　③ いちご　④ ピーマン　基本編

（導入 ⇩ 「読み方」の観点 ⇩ 練習確認）

⑤ 玉葱　⑥ サボテン　⑦ レモン　展開編

（基本の確認 ⇩ 展開／個性化）

詩の授業

①　白葱

まっすぐな一本の決心

はたちよしこ（②～⑦も同じ）

②　青首だいこん

ここが
首だったのか
じぶんでも
しらなかった
まわしてみようか

⑤　玉葱

身をはがれ
こまかくきざまれては
黙ってなどいません
相手の目に
刺すような　痛みを
お返し

⑥　□

(1)
どうか　わたしのうえに
風船を　おとさないでください

(2)
自分のトゲで
だれかを
きずつけてしまわないかと
いつも　心を痛めています
花が咲いたときだけ
ほんのすこし
つぐないができたような
気分になります

③ いちご

いちごが自分の体に書いた
読点ばかりの作文
、、、、、、
、、、、、、
、、、、、、
文字は知っているのですが
おもっていることがあふれるほどあって
読点ばかりになるのです
、、、、、、
、、、、、、
、、、、、、

④ ピーマン

だれにも　すかれようなんて
おもっていません
肩をいからせ
胸をはり
なかには
辛口の意見を　いっぱいかかえて

⑦ □

1 □
2 遠くへ　行きたいのです
3 うすく切れば
4 それがわかります
5 うすく切れば
6 いくつもの　車輪
7 いいかおりをふりまいて
8 車輪　車輪　車輪
9 □ は
10 遠くへ　行きたいのです

(3)

教材観

① 教材の詩は短く、言葉も平易、題材（野菜・果物）も親しみやすいものである。

② 詩（文学）を読む楽しさと魅力を、「読み方」の基本の学習とともに学ぶための教材として有効である。

③ 1編の詩の詳しい分析や図式化は指導者の自己満足に終わりがちで、ややもすると子どもに「詩って難しい」「自分で読んだ時と違う」といった印象を与えが

ちである。もちろん、指導のねらいによっては、また、ポイントをしぼった指導の工夫があれば、1～2編の詩を数時間で扱うことも有効である（教科書教材の少なさ、性質の問題も背景にはある）。

④　複数の詩（3～4編）をポイントをしぼって扱う指導は、比較対照／観点からの「読み方」の学習／詩人の表現の個性と常識／詩の意味と批評性（読者）等、詩人の語彙と方法、文体等の「詩の学習の本質」的特質に気づかせるのによい指導方法である。

⑤　はたちよしこの詩の特質と解釈、教材性等についての詳細は、本稿一～三を参照。

(4)

児童観（生徒観）

①　小学5年生は、思考・表現両面でまだまだ自己中心的な要素は残るものの、中学年（3・4年生）と較べると、他者（友人・先生・親・その他）との関係に対する配慮が構造的にできるようになる等、全体の中での自分の位置や行動を「客観化」できるようになる。また、論理的な自己表現（抽象的思考操作）も、「自分らしさ」を意識しながら模索しつつできはじめる時期である。

②　小学5年生の時期の教科書教材（ここでは文学教材）の多くは、多様なジャンルが増えはじめ、内容的にも複雑であり、深い読み取り（感動・表現の追究・ノートにまとめる等）を求められるものが多くなる。授業では、ややもすると「内容」の読み取りに時間がかかり過ぎ、それに終始しがちである。「基本」（典型）としての「読み方」、その着眼点の学習から、「展開」（応用）といった系統的指導は、どうしてもきわめて不十分になりがちである。

③　小学校高学年以上中学高校における、詩の〈言語技術教育〉の授業として位置づける。

(5)

指導観

①　指導観

ア、詩を読む面白さという「体験」を、よく分かるという「実感」とともに味わえるよう構成する。

イ、詩を「論理的に」「正確に」読む部分と、「豊かに」「個性的に」読む部分を区別し、言語構造のレベルから（語句の組合せと効果等）気づかせるよう配慮する。

ウ、詩の「言語技術教育」の立場から、詩の「読み方」の基本と展開について体験的に気づかせる。

②　指導にあたって（指導上、特に留意する点等）

ア、リラックスした雰囲気の中で、この授業の目的は詩の「読み方」の学習であること、授業の終わりには、学習したことをもとに自分の率直な感想意見を持つことが大切なこと等、を強調する。〔授業のね

らいの明示と、態度の形成〕

イ、①～②までの詩の学習では「読み方」の基本を、⑤～⑦では「展開・応用」の学習である。授業の終わりには、感想意見を配付用紙にまとめて提出する。

〔3段階の授業構成〕

ウ、①～④での学習では、発問や課題・指示説明等は易しく、時間をかけすぎず、簡単なもので構成し、全員に「分かる」「楽しい」という実感を持たせるよう配慮し、授業に参加させる。

エ、⑤～⑦は「展開・応用」の学習。

前半の学習のポイントを生かす部分と、個性的な解釈鑑賞の部分を意識的に区別した発問・指示し・説明等を工夫する。子どもが⑤～⑦の詩に、自分なりの魅力を楽しく「発見」できるよう指導する。

オ、感想意見のプリントを記入する。

(6) 評価

① 詩を読むことを喜び、楽しむことができたか。

② 詩の「読み方」の基本（言語技術）に気づくことができたか。（語句の選択と構成・イメージとリズムの特質・ユーモアや視点面白さ等）

③ 「基本」を生かした「展開（応用）」の読み方を知ることができたか。

④ 詩についての自分の判断（好み・解釈）を持ち、表現することができたか。

⑤ 詩を読むことへの意欲関心が生まれているか。

6、指導計画（指導過程）

時間配分	指導事項（教育内容）	学習活動（発問・指示・作業内容等）	指導上の留意点・備考（評価の観点と方法／他）
分	1授業のねらい	1、学習のめあてを知る。 ・詩の授業―①詩の楽しさと魅力 ②「読み方」の学習	・題名「詩の授業」を板書

分			
2既習の学習、読書状況の確認 ⇦ 授業のねらいへの意識化	2、これまでの「詩の授業」「詩」の読書体験を振り返る ・発問課題① 今まで読んできた詩の中で、とても好きな忘れられない詩（詩人）はありますか。 ・発問課題② 詩の「読み方」について。詩を楽しく読むためには、どんなことに注意すればいいか、言ってください。	・授業のねらいを意識化させるためのもの。 簡単に確認する。 （個々のこどもの実態と関心のありかたを確認しつつ） ・五名くらいに指名。 板書する。理由・思い出等も語らせ、賞賛する。 （自己表現の自由の保証と評価－授業の雰囲気づくりも） ・五名くらい指名。 キーワードを板書する。 ・記憶を評価する。 （覚えていることの確認。繰り返し／語句／比喩／主題／文末表現／リズム～）	
3プリント配付 4授業のすすめかた	3、教材を受け取る。 （詩のプリント・はたちよしこの詩7編印刷） 4、はたちよしこの詩7編を扱うこと。 授業の最後に好きな詩を選んでもらうこと。	・B4用紙に、詩7編。 ・はたちよしこの詩。 ・反応を観察する。	

5「①白葱」の学習

※変形版

まっすぐな一本の

□

(1)「決心」を空欄にし幾つかから選択させる。・夢／野菜／決心／かなしみ。

(2)「決心」という名づけ（認識／判断）と「白葱」の白・「まっすぐ」の直線的で意思の強さ・ひたむきさ等の関係に。

(3)夢／かなしみも、いちがいに否定しない。詩の構造に気づかせることがねらい。

(4)「野菜」はそのままで飛躍がない。葱の「説明」である。

6「②青首だいこん」

5、①白葱を読み、表現のユニークさと特色に興味関心をもつ。

・先生の範読を聞く

・発問課題③

野菜の詩ですね。
この葱の色は何色？（イメージは）

・発問課題④

葱の「形」はどんな形？
線を引いて下さい。

・発問課題⑤

「決心」と書いた理由を説明できる人は？

6、②青首だいこんの「語り」の面白さ

ユーモラスな雰囲気に気づく。

・範読を聞く

・友達の「読み方」を聞く

・発問課題⑥

・易しく簡単にすすめる。

・白葱のイメージ

きれい・さっぱりしている

新鮮な感じ・洗いたて

（「青葱」と対比も）

・「まっすぐな一本（の）」。

形態の表現の確認

・野菜の「形」「イメージ」

＋

人間の気持ちや感じ方を表現

（詩人の判断・発見・見方）

⇦

意外な感じ／楽しさ／改めて野菜をみなおす

・指名読。または、「読みたい人」（挙手）に。

分		
7「③いちご」	7、③いちごの味と形（種）のイメージと「作文」を書く思いの重なりに気づく。 ・範読を聞く ・友達の読み方を聞く ・発問課題⑦ 「、、、、、」って何のことかな。気がついた人は？ ・説明 この詩は二つのことを組み合わせて表現した詩です。 いちごのタネ（形） ＋ 作文で思いがあふれる気持ち	この詩、なんとなく可笑しいね。面白いところを言葉で説明してみよう。 ・補足ー大根の「首」ってどこ？ 青首クンの性格は？ 首は「まわる」のか？
		（以下、斉読でもよい） ・「楽しい？自己発見」の詩。 ・青首大根自身の「語り」（表現の視点）がのんびりしたユーモアをかもし出す。 ・驚きと無自覚が楽しい。 ・おっとり／のんびり／大分間がぬけている
	・「おもっていることがあふれるほど」あって、作文・文章が書けない気持ち。 ・読点のこと。 ・苺の種のこと。 （いちごのおいしさ／言葉にいいあらわせない程の） ・苺の味覚 …言葉に言い表せない程の美味しさの表現	

分		
8「④ピーマン」	・発問課題⑧ では、「、、、、、」の隠れた、もう一つの意味は何でしょう。 ・補足ー「、、、」の意味は3つあります。ひとつは、～。 この詩の上手いところは？ 8、④ピーマン。子どもの多くがピーマンを嫌うという「常識（的印象）」と肩をいからせたような「形・形態」の組合せからくるユーモアに気づく。 ・範読を聞く ・友達の読み方を聞く ・発問課題⑨ ピーマン、嫌いな人は？（挙手） どうして？ ・発問課題⑩ ピーマンがみんなに嫌われがちなことを、ピーマンの側から表現している所はどこでしょう。	・板書に付け加える いちごのタネ（形） ＋ 作文で思いがあふれる気持ち ＋ 「、、、、」（いちごの美味しさ） ・人数確認。 理由も聞いてみる。 ・「クレヨンしんちゃん」も嫌いである（例）。 ・野菜の「常識（的印象）」を生かした詩の方法に自覚的にさせるきっかけに。 ・「だれにも　すかれようなんて／おもっていません」 ・相手に合わせない自信・誇り（いじけな

分			
9基本学習のまとめと解説 板書　例 詩の授業 ・詩の楽しさ ・詩の「読み方」		・補足ーピーマンのプライド（自尊心・誇り）が表れているところは？ ・発問課題⑪ ピーマンの「形」をとてもよく表現しているところに、傍線を引いてごらん。 ・発問課題⑫ 「いっぱいかかえ」た「辛口の意見」って、ピーマンのどんな意見でしょう。ピーマンの立場になって答えてみましょう。 ・補足ー「辛口」の意味（辞書的意味） 「辛口の意見」が指すもの （文脈上では、中の種）	い）のイメージも ・野菜の「形」（味）を生かした詩の方法に自覚的にさせるきっかけ。 ・「肩をいからせ／胸をはり」 （「なかには／辛口の意見～」を挙げる子どももいる。） ・例。「ピーマンは栄養があるから、食べないと大きく強い体にならないよ。」 ・食べにくい面もあるが、それでも避けていてはいけないとという「厳しさ？」を「辛口」と言った。 ・もう一つの意味は、中の種が「辛さ」の原因という味覚の類比（アナロジー）から。
9、①～④までの学習（基本）のポイントを確認する。要点は板書する。 重要事項の定着化と、⑤～⑦の学習の「観点」「方法」「態度」を示すためである。 ・説明	・はじめは緊張していても、授業がすすむにつれて、詩の細部にも目が行き、細かい感想や意見をもちはじめるのが普通である。 ・「正確に」読む部分と「個性的に」読む分が交錯し、授業のねらいも曖昧になり		

○何の詩？
野菜…葱・大根・ピーマン
果物…いちご
○言いたいこと（テーマ）
「新しい見方」「発見」の喜び楽しさ・優しさ・ユーモア～
○「読み方」と態度
・詳しくものをみる態度と言葉で表現すること
（形／味／印象／雰囲気等）
・相手の立場から考える
（野菜の立場からみるとみえてくること・視点）
◎言葉の選び方・使い方と組合せ、その効果とおもしろさ
・白／まっすぐ／
・笑い、ユーモア、楽しさ
・語りかた（言い方）
⇨
詳しくなくてもよい。

4編の野菜と果物の詩を読んできました。
これらの詩の言いたいこと（テーマ）は、一言で言うと
『発見』の喜びと表現です。

・発問課題⑬

表現がとても楽しく、個性的でしたね。
（どうでした？）
では、表現のしかたで気づいたこと、詩の「読方」で大切だと思ったことを自由に言ってください。

・子どもの答え方にはレベルがある。個別の詩の「言語操作／構造」について発言する子、全体的に「抽象化」して言う子、教材から離れて自分の体験や読書から語る子等である。
・評価しつつ、要点・キーワードを確認（板書）する。
・「感想（個性化）」は後で詳しく別紙に書いてもらう。

がちなので確認が必要。
・時間をかけすぎない。
ノートへは後で書くよう指示
○題材／テーマは教え、「表現方法」「構造」の特質について、気づいたことを発表。
○「言語技術」の特質について典型的なものを取り出し、対比的に扱い強調する。
例　・白葱 ⇩ 泥葱／青葱？
・まっすぐな一本の
⇦
ゆがんだ？一束の？
○語句の選択／組合せ／効果
雰囲気／
○語り方（立場／視点）を変えた（ズレた）ところからくるおもしろさや意味
○見慣れた現実／日常／人間／生活の中に、「真実」「人生」「人間性」を『発見』する詩
○怒り／笑い／誇り（プライド）／悲しさ／ユーモア～等の文体の特色を、言葉と文脈・視点等から気づかせる。

分			
10「⑤玉葱」の詩	10、⑤玉葱。 玉葱の詩は、形・味のイメージではなくてべつの要素（常識的印象）を利用した詩。ユーモアに気づく。 ・範読を聞く ・友達の読み方を聞く ・説明 玉葱の立場から、きざまれる立場からの「発言」「意見」です。 ・発問課題⑭ この「玉葱」クンの性格は？　どこから分かる？ ・発問課題⑮ 「白葱」はネギの形、「青首だいこん」も大根の太いクビの形、苺のピーマンもそうでした。 では、「玉葱」では形もあるけれど、他に「玉葱」のどこに目をつけて表現しているかな？	・「料理／調理法」のイメージの利用、刻むと涙がでる辛さをきざまれた「お返し（仕返し）」という点が楽しい詩。 ・気がつよい。負けず嫌い。 ・「相手の目に／刺すような痛みを／お返し」 「黙ってなどいられません」 ・「身をはがれ／こまかくきざまれては」 ⇦ 料理・調理法 ・表現の視点に自覚的にさせる（ユーモアの表現的根拠）	

分		
11⑥「サボテン」の詩 ※参考「サボテン」の解釈 サボテンの「常識的印象」 ・水も少ない砂漠や荒野でも生きていける。 ・他の植物のように美しくない（観葉植物のひとつ）。 ・強く逞しく、他の生き物や植物等とと「関係」なく自由きままに生きている？ ⇦ 意外な真実・心理 ・他者を傷つけることをいつも気にして「心を傷めている」。「自分のトゲで」。 ・自分のことを「客観的」に認識している〈人間的な優しさ〉〈自分を知っている自分ではどうにもならない	11、⑥「サボテン」の詩 トゲトゲしい、荒野に生きるたくましいサボテンのイメージとは異なる意外な真理（心理）の面白さを味わう。 ・友達の読み方を聞く ・発問課題⑮ 空欄には何が入ると思いますか？ 1分間考えてごらん。 相談してもいいですよ。 理由もちゃんと言えるといいなあ。 ・指名と発表 ・討論的に扱う。 対立意見をとりあげ、「論争」「根拠」「解説」させる。 ・補足。 「サボテン」の常識的イメージを確認する。	・題名の「サボテン」を空欄にして、クイズ（推理）形式で考えさせる。 ・題名を当てさせた後、表現の特質・構造を発表させる。 ・1分。時間を区切ると集中する。 ・隣どうしで相談させる。 ・机間巡視で様子やこれまでの学習が生かされているかとらえる。 ・指名して答えさせる。 理由を言わせると表現の検討につながる。 ○野菜／果物ではなく、ここでは「植物」である。 ・「自分のトゲ」「花が咲く」がヒント。 ・「風船」と「トゲ」の対比がサボテンの不安な心理、こわれやすさ、優しさを強調する。 ・「花」＝つぐないの気持ち、という意味づけが優しい人間性を強調する。

ものを知っている優しさと哀しさ）がテーマ。	分 12 ⑦「レモン」の詩 ⇩ 詩の上に番号をふる。 1～10行。 ○詩の「構成」に気づかせるための発問 (1) 3～6行。薄く切ると「いくつもの車輪」がみえるということ。形態の類似の発見。	ここでの意外な心理との対比／ズレ ⇩ 表現の理解へ 12、⑦「レモン」の詩 レモンのイメージ、感覚と「あこがれ」が組み合わされた詩的な世界と表現構造（言語技術）を味わう。 ・友達の読み方を聞く ・発問課題⑯ 空欄には何が入るでしょう。1分間、相談してもいいですよ。理由も言えるように。 ・補足－わざと、異質なものを挙げて詩の世界の対比する。 例。かぼちゃ。なす。きゅうり。 類似例。ミカン。グレープフルーツ等。 ⇧ ・発問課題⑰ レモンは／遠くへ行きたい、と作者が考えた理由（きっかけ）は二つあります。何でしょう。	・レモンの美的感覚的イメージと「遠くへ行きたい」という希望／意思を組み合わせた詩 ・「遠く」の解釈。 プラスの意味 － 旅／夢／憧れ／恋等 マイナスの意味 － 挫折／逃避 ・テーマ 〈あこがれ〉〈夢・希望〉等 （3～8行を強調すれば、レモンの秘密／響き／香り等もテーマになる） ○表現の特質（この詩らしい個性と言語技術） ※なるべく子どもたちに「発見」させることが「展開」授業の成果となる。 (1) レモンの輪切りという「形」のイメージと「車輪（馬車を暗示）」の類似の発見 ・組合せの効果 (2) レモンの輪切りの感覚（味覚嗅覚、視覚、雰囲気等－香り色彩・雰囲気）から、馬車が軽快に駆ける「響き」と車輪の回転／リズムの想像。

	(2) 7～8行。「車輪」が3回繰り返されている⇨「車輪＝馬車の走り」という想像。 ○表現の多面的な方法／現実をみる視点に気づかせる発問。 ・7～8行。 感覚的イメージ。香り／色／雰囲気／馬車が軽快に走る空間／リズム。 ○詩の「個性的」解釈 （「個性的に」読む部分） ・ロマンティクなあこがれ夢……といった雰囲気がとらえられているか。 ・個別な場所というより、「日常」「今」から離れた別の世界。「非日常的な世界」。
13まとめ	(1)「感想プリント」を配付。 (2)必要事項を書いて提出する。

・発問課題⑱

> 3～6行は目で見た表現です（視覚的イメージ）
> それ以外で（レモンの甘酸っぱい）味や香りが分かる表現に傍線を引いて下さい。

・発問課題⑲

> レモンが行きたい「遠く」ってどこだと思いますか？（どんなところ？）

	(3)詩人の心のリズム＝詩の表現 （あこがれ・夢） （サ・シ音の響き、他） (4)繰り返し／2行単位の構成／ (5)「空間性」「感覚性」他 その他 ・補足／発問課題 心が弾むようなリズムは、詩のどこから感じられるのでしょう。 ○詩の音楽性／リズムの発問 ・未知の世界へのあこがれ、その心のリズム。 ⇦ ・「車輪」のリフレイン ・2行単位のすっきりした表現 ・1／2／9／10行のリフレイン ・サ音シ音のすがすがしさ。 ＋ ・レモンの感覚／イメージ
	・挙手による「自己評価」「判断、好み」の確認。

（提出日を指示）
(3) 終わりのあいさつ。

・プリントに詩の「読み方」と授業の感想を書くことを知らせる。

おわりに

本稿は、文学の〈言語技術教育〉論の一環として、はたちよしこの詩作品を7編取上げ、詩教材の〝言語技術〟教育の具体化（授業構想）を考えようとしたものである。はたちよしこの詩作品は、平易で親しみやすく楽しい作品でありながら、近現代の本格的な詩に特有の言語構造と方法（〝言語技術〟）、そしてユーモアや機知（ウイット）等の優れた文学的表現の効果（多義性）を備えている。観点を決めて、指導するならば単に「自己表現」の方法（例示）としてだけでなく、文学教材の基礎的「読み方（理解技術）」の観点に気づかせながら、詩の楽しさと詩の〝言語技術〟の基礎的方法に親しませることができる。

しかも、ここで示した方法と観点は、はたちよしこの詩の特質に即した観点であり、同時に近現代詩を読むための一般的な原理（読み方の観点）でもあるため、ここで学んだ「論理的な」方法は他の学習でも応用でき、結果的に「個性的な」鑑賞と解釈を深めていくことになる。

ところで、詩における〝言語技術〟の概念（定義）についても、その方法論・授業実践の構想についてもまだ確定したものがあるわけではない。《言語技術教育論》の構想や輪郭については稿を改めて述べる予定であるが、ただ、新学力観の提唱のもと、音声言語教育や関心意欲態度の重視・評価基準の見直し等、従来の学習者観／授業観／指導観等の変更が求められている現在、国語科で育てる「言語能力」の構造（論理的思考力や表現力の内実も含め）が曖昧なまま、授業実践が混乱しいろいろな観点が交錯し、拡散している傾向も一部にはみられるようである。文学教材の魅力と「教育内容」を〝言語技術〟の観点から考察することは、論説・作文教材における〝言語技術〟を考えることであり、それは国語科でつける「言語能力」の構造と方法を具体的に、授業研究レベルで明らかにすることだと、私は考えている。

なお、本稿で示した指導計画をベースに二時間構成で実践化し検討する機会を得た。平成五年六月一五日（水）岡崎市立細川小学校5年4組40名〔男子23名 女子17名〕、授業者は学級担任・谷由美子先生である。授業の詳細な報告は省くが、7編の詩を子どもたちは喜び楽しく読んでいた。特に「サボテン」「レモン」「ピーマン」の3編が好まれていたようである。[10]

（注）

1、詩教材の指導については、これまでも「教育内容」の曖昧さ／「鑑賞」と「分析」／「見方の詩教育」／児童詩の創作指導等、多様な立場から論じられてきている。しかし、文学の〝言語技術〟の方法という観点からのものはみられない。なお、先行研究についての批評と考察は別な機会に行いたい。

2、本稿の前提には、拙稿「詩教材におけるイメージの特質と構造」『国語科教育　第36集』（全国大学国語教育学会、１９８９年）／「言葉の『詩的な構成』に気づかせよう」『月刊国語教育〔１９９０年２月号〕』（東京法令出版、１９９０年）等がある。

3、本稿の一～四の部分は、第85回全国大学国語教育学会（岩手大会、１９９３年10月21日）で「詩の言語技術教育－イメージと言語技術についての基礎的考察－」の一部として発表し、その後「詩のユーモアと言語操作－はたちよしこの詩の魅力と表現構造－」『月刊国語教育研究№２６０、１９９３年12月号』（日本国語教育学会、１９９３年）にまとめたものである。今回、ほぼ全面的に改稿し、五の「指導計画」のための教材研究論として位置づけた。

なお、鶴田清司氏に「レモン（はたちよしこ）」を「言語技術」の観点から考察した実践と考察がある（藤岡信勝・鶴田清司編『ストップモーション方式による１時間の授業技術〔小学国語／文学教材５年〕』日本書籍、１９９４年３月）。基本的な立場は共通な部分もあるが、「場面」や「構成」の単位への視野が見られず、氏自身の〈主題〉の構造的把握と解釈も分かりにくい、また言語構造の部分と全体の位置づけが曖昧である。１時間の授業という制限やシンプルな指導という配慮もあってのことかもしれないが、これでは「論理的に」読む部分と「個性的に」読ませる部分の評価基準がはっきりせず、結果として「分析（表現技術）」の学習が自立した「鑑賞」につながっていかないように思われる。

4、詳細は第87回全国大学国語教育学会（神戸大会、１９９４年10月19日）「詩の言語技術教育 －〈構成〉概念をめぐって－」で報告した。

5、「詩の文体に気づかせる指導研究－萩原朔太郎の詩を例に－」『国文学・言語と文芸／第１０５号』（大塚国語国文学会、１９９０年）／「村野四郎の詩についての一考察 －『塀のむこう』の恐怖－」『月刊国語教育研究№２３７、１９９２年２月号』（日本国語教育学会、１９９２年）等。

6、拙稿「文体」『国語教育研究大辞典（国語教育研究所編）』（明治図書、１９８８年）参照。

7、「作品ができるまで－レモン」『少年詩の世界（現代少年詩集編集委員会）』（教育出版センター、１９９２年）参照。

8、注４に同じ。

9、「論理的に（正確に）」読む部分と「個性的に（豊かに）」読む部分の意識的区別の必要性については「基本と応用のつなぎめを強調した指導を」『教育科学・国語教育１９９２年８月号』（明治図書、１９９２年）で述べた。

10、授業実践にあたって、細川小学校の先生方には学校行事の慌ただしい時期にも関わらず、こころよくご協力いただいた。深津吉尭校長先生・５学年の先生方、そして谷由美子先生と40名の子ども達に心からお礼申し上げる。次表は７編の詩についての挙手によるアンケート結果の概要をまとめたものである。

1．全　体

順位	作品・教材	計 ／ %	男子・女子別		備　　考
1	⑥サボテン	23（31.5%）	11	12	空欄による形式 展開学習の詩
2	⑦レモン	17（23.3%）	6	11	
3	③ピーマン	13（17.8%）	8	5	
4	⑤玉葱	7（ 9.6%）	6	1	男女によって、 好みに差が出ている 基礎学習の詩
5	④いちご	5（ 6.8%）	1	4	
6	①白葱 ②青首だいこん	4（ 5.5%） 4（ 5.5%）	4 4	0 0	
合計	詩は７編構成	73	40名	33名	／73名（２つ選択）

注１、児童数40名（男子23名／女子17名）
　２、各自、２つ好きな詩を選ぶもの。
　３、一つだけ記入(男子)……白葱１、青首だいこん１、玉葱１、サボテン１、いちご１
　　同　　(女子)……いちご１、レモン１

2．男女別

(1) 男　子

順位	作品・教材	計 ／ %
1	⑥サボテン	11（27.5%）
2	③ピーマン	8（20.0%）
3	⑤玉葱 ⑦レモン	6（15.0%）
4	②青首だいこん ①白葱	4（10.0%）
5	④いちご	1（ 2.5%）
		40名

注１、「サボテン」が人気あるのは女子と同じ。
　２、しかし、「レモン」に変わって、男子では「ピーマン」が第２位になっている。自分への自信・プライド等が好まれている。
　３、「玉葱」は男子６名、女子１名と差が出ている。相手へのお返し（反撃）の意味やユーモアが好まれている。
　４、自己主張と対他者関係、ユーモア、明快なイメージ等に関心が向いた選択である。

(2) 女　子

順位	作品・教材	計 ／ %
1	⑥サボテン	12（36.4%）
2	⑦レモン	11（33.3%）
3	③ピーマン	5（15.2%）
4	④いちご	4（12.1%）
5	⑤玉葱	1（ 3.0%）
6	①白葱 ②青首だいこん	0（ 0.0%）
		33名

注１、「サボテン」「レモン」に関心・好みが集中。二つで全体の７割（70,7%）を占める。
　２、「白葱」「青首だいこん」はゼロ。男子と対照的。「いちご」も男子１名なのに、女子は４名選んでいる。
　３、「サボテン」「レモン」「いちご」に共通する優しさ・繊細な感覚と感情・想像しやすい美しいイメージ（ロマンチック）とリズムが好まれている。